



伊藤ガビンの 大人の宿題提出

vol.06 まだ、鉄を叩いてなかった

文・企画：伊藤ガビン 撮影：安田仁志 構成：胡口桂子

いま自分が突然、原始時代にタイムスリップしてしまったら??
 戦国時代にワープしたら、僕って戦国なに隊?
 そんなどうでもいい想像を、子どもの頃からしていたし、実は今もよくするのだった。
 深夜、酔っ払ってなんとなく入ったラーメン屋で
 特に食べたくもなかった味噌野菜ラーメンの具をもてあそびながら思いを巡らす。
 なーんにもない世界にボンと放り出されたら、
 自分の知識と技術だけで、どんな道具を作り出せるかな〜? と。
 たぶん、コンピュータは、ムリ。
 原理はわかるんで、いろいろと道具がそろったら、すごいしょぼいやつは作れるかもと。
 トランジスタ? 抵抗は? 電球ひとりで作れる?
 という風にどんどんどんどん技術史をさかのぼって行って、そんなものより
 もっと必要な、道具を生み出すための道具を作らねば! とか思ってね。
 で、火を起こせるか、刃物はどうか? とか思い至るわけです。
 道具を手にして進化した人間ですわ。最初に持つべきは刃物でしょう! とかね。
 まあ、そんなことを夢想しながら、まずは石器を作る自分を想像するわけです。
 うん、これは余裕だな、と。
 で、その次に、青銅器やら鉄器を作る自分を想像すると……できない!
 細部がよくわかんね〜~~~~~んですよ!
 やばい! おれ、弥生以前で止まってんじゃん!!!!!!
 というわけで、前フリが長くなりましたが、今回は鉄を叩いて刃物を作る!
 子どものときにやり残した「宿題」、というよりもむしろ
 弥生時代からやり残し続けてきた宿題提出ってことです!
 美しい日本刀の世界を、ふらふらと体験させてもらいましたよ。

刀を作ることも、持つことも、普通のことなんだよ

今日の先生は、高野行光刀匠。刀の表面に浮かぶ「肌」と呼ばれる模様のマエストロだ。刀匠という、
 気むずかしくて、無口な職人というイメージだが、高野さんは話す話す。しかも話が滅法おもしろい。
 そのわけは、刀をもっと普通のものにしたいようで。



伊藤 早速ですが、先生はどうして刀匠になると思ったんですか?
高野 俺らの頃はね、刀ブームだったのよ。テレビでも、刀が主役の番組とかあってね。
伊藤 え! 刀が主役??
高野 ほんとほんと。ある剣を主人公にしてね、その剣をどうする侍がもっていて、その後誰の手に渡って、というような話だったと思うね(*1967年にスタートした時代劇「剣」。このシリーズは黒澤映画のスタッフなどがそろって作られた伝説の番組だ)。この影響は大きいね。だから、いま50代60代の刀鍛冶が多いのはさ、ブームがあったからなんだよ。
伊藤 刀鍛冶のイメージとちがいますねえ! ブームにのってなるものだったんですか?
高野 そうだよ。「スチュワーデス物語」が流行ったときには、スチュワーデスの受験に倍の人数が来たとかいうじゃない。あれとおんなじよ。人数が多ければ、下手な鉄砲も数撃ちゃあたるじゃないけど、その中には天才が混じってる可能性もあるよなあ。うちの先生の大野義光とかね。
伊藤 じゃあ、刀を買う人っていうのもやっぱり同じような年代の人が多いんですか?
高野 ブームの頃にお金を持って、刀を買えた人っていうのは、もうちょっと上の年代なんだよね。そういう人たちが

今ちょうど70代80代になってきて、手放す時期に入ってきている。だからちょっと前にはお目にかかれなかったような名刀がだんだん市場に出てきてますよ。価格も下がっているしね。買うにはいい時期ですよ。
伊藤 うーむ、目から鱗がおちますね。刀鍛冶、刀匠、日本刀なんて聞くとやっぱり神聖で敷居の高いイメージですけど、やっぱりひとつの職業であり、世界に誇れる美術工芸品でもあり、それでいて商品でもあるんですね。
高野 そうそう。あんまり堅苦しく考えることはないんだよ。普通に買えるものなわけだし。
伊藤 え? そんなに普通に買えるんですか? 免許とかいらないんですか?
高野 そこは誤解されてることが多いんだけど、いらないんだよ。登録証のあるものだったら自由に買える。
伊藤 刃渡り15cmっていう制限は?
高野 それは作る方の制限。15cm以上の日本刀を作るには免許がいる。ナイフは作れるのにな。極端な話、アメリカに行けば免許なくても作れるんだよ。へんな話だよな。
伊藤 なるほどー。それはちょっと政治の匂いがプンプンしちゃう話ですね。
高野 むかしは、好きで作ってた人もいると思うんだよな。普通のことだったと思うの。そういう風になってほしいと思うんだよ。そうじゃないと裾野が広がらないから、今みたいなままだと廃れちゃうよね。
伊藤 先生は刀ってものをもっとカジュアルにしたいんですね(笑)。
高野 だって、普通のことだと思うからね。もっと趣味の鍛冶屋がいてもいい。
伊藤 洪鍛冶みたいな。あ、すいません。刀を作る作業の中で、一番好きなのはどの作業ですか?
高野 鍛えだね。
伊藤 叩いて折り畳んでいくあたりです

か。そのどういう部分が面白いんでしょ。
高野 とにかく面白いね。どういうってのはないよ。ただ面白い。こういうことを理屈なしに面白いと思える人がやればいいと思うんだ。
伊藤 やるっていても自宅ではできないわけだし、やっぱり敷居高いですよ。
高野 それはうちに体験しに来てくれてもいいし、そこで興味もったらもっと深いところまでやったらいいんだよ。ふいごを使うのがたいへんだとかいうのもさ、モーター使えばいいんだよ。ハンマーも機械使ってないところはもうないと思う。こういうこというと嫌がる人も多いけど。でもこのままじゃ廃れるばかりなんで、たくさんの方が刀に興味をもって、刀を見る目をもってくれたら面白いと思うんだけどね。
伊藤 今日ちょっと見せてもらっただけでも、刀の表情の豊かさに驚きましたもん。
高野 本当の名刀っていうのはさ、やっぱり感動できるんだよね。そういうものを廃れさせちゃったら寂しいよね。



高野行光刀匠のお弟子さんの小澤さん。免許試験に合格して、独立したばかり。高野さんは、若い人を育てることに積極的。ただし弟子選びは、「遊び半分の人しかとらないよ」と、カジュアルな高野さんらしい基準。

伊藤ガビン / いとうがびん / 編集者・ゲームデザイナー / 63年、神奈川県生まれ / 『バラバラッパ』、『動物番長』など個性的なゲームの多くにかかわる。独特な情報収集・視点を個性的な文体で綴る文章も評価が高く、NTT Dataサイト『先見日記』での木曜担当や、雑誌『新車王』での「クルマを高性能コンピュータに見立てた」連載も好評。秋に立ち上げた『黒松ボックス』 <http://kuromatsu.jp/books/> なる「本レーベル」では次々に珍書・奇書を編集し、12/14~28フォーレミュージアム原宿で行われるタナカカツキの『タナカタナ夫展』は総合プロデュースを担当。



高野行光 / たかのゆきみつ / 刀匠 / 52年、茨城県生まれ / 柴田錬三郎の小説から刀剣に憧れ、高校2年生で都内の研究会へ。73年、芝浦工大金属工学科を3年で中退し陸上自衛隊へ入隊後、34歳で大野義光刀匠に入門するまで14年つとめあげる。新作刀展への初出品は96年。肌物を得意とし、帝室技芸員、人間国宝を生んだ名門・月山系の家伝「綾杉肌」を自流で会得する。性質の異なる鉄を組み合わせて文様を表現する肌物は刃が冴えない……という定説を覆す、美しい綾杉肌が得意。現在は、希望者を募って小刀教室も指導中。



熱して叩いて熱して叩いて刀作り!

いよいよいよいよ刀作りですよ! き、きんちょうする。基本的に高野行光刀匠は、カジュアルな先生。えらぶことなく、アホ生徒にどんどん作業してくれますぞ!

③ 鑄ったり

ゴリゴリゴリするで! 今回作って作った刀をよく見ると、片側は 真っ平ら。もう片側は、なめらかにカーブ。片側はツルツル。片側はやすりのヘアライン仕上げっぽかったりする。これを鑄ってつけていくんです。



刃と反対側の棟(ムネ)も、刀の美しさを決定づける大切な場所。これも地方や流派によって形いろいろ。

特殊なカンナで、刃の表面を剥く! 先生の仕事を見ると全然力いれてないように見えるけど、ムリ。全然。



刃文って?

刃の見どころとして、最もわかりやすく、とっつきやすいのが刃文だろう。刃文というのは、刃に光をあてたときに刃に沿って見えるラインのこと。刃のうっすら白い部分とはまた別なので注意ね(こちらは研ぎで作られるんだって)。刃文は焼き入れによる温度変化の中で生じるもの。流派によっていろいろな刃文があって、鑑定にも役立つんです。

熱して叩いてといういかにも刀鍛冶! という仕事はひとだんらく。大ざっぱに刀の形になったものに、今度はやすりをかけたりカンナをかけたりしてさらに形を整えていきます。焼き入れ前とはいえ鉄ですから。堅え。

④ 銘を切る!

オ、オレの名前の入った刀を作るんだな。なんか、えらそ〜〜!

⑤ 焼き入れ

いよいよ、最後の工程ですよ! 焼き入れ! いつもはカジュアルな先生もこのときはばかりは緊張の面持ち。照明も消して、刀の変化を見逃さず見つめますぞ!



刀匠が責任もって名前を入れるのが銘。タガネを叩いて入れるんで激ムズ。無責任なことに先生にやってもらいました。



まずは焼刃土という泥状の土をぬります。刃になるところは薄く。それ以外は厚く。その差が刃文をつくる。



土が乾いたら、いよいよ火の中に。この温度の変化、タイミングの差で、美しさ、強さが変わってしまうとか。



慎重に秒数を数えながら観察し、いまだ! という瞬間に水の中にジュジュジャー! とつけて急速冷却。

⑥ 研ぎで、仕上げ

よっしゃああああああ! 作業終了〜。あとは立派な刀になるのを、待つ!



焼き入れジュジュと終わったら、泣いても笑っても刀匠の仕事というのはここでいったんおしまい。あとは研ぎ師さんに研いでもらって、鞘師さんに鞘を作ってもらいます。日本刀にとって研ぎはすごく重要な要素で、素人にはとても手の出せない世界。刃の白く美しい部分は、研ぎ師さんの手仕事なのだ。刃文の通りに研いだり、わざと刃文とは関係ない形で研いだり。刀匠の仕事が終わっても、研ぐためのお金がなくて刀として完成できないこともあるんだとか。研ぎの世界も奥が深そう! そして最終的にピタッとくる鞘を作ってくれる鞘師さんの仕事もまったく僕らが知らないことだらけなんじゃないかな。しかし知れば知るほど、おもしろい。

完成!!



① 玉鋼の用意〜積み沸し

まずは、砂鉄の塊「玉鋼」から作っていきます。ほんとにゴツゴツのただの堅めの岩みたいなものから作っていきんですな。原始!



左手で「ふいご」をシュコシュコして火を調整。そこへやっこみたいなので掴んだ玉鋼を突っ込んで熱く熱く赤く赤くなるまで熱していきませう。シュコシュコすんのたのしー。



赤くなった玉鋼をコーンコーンと鑄で叩いた後がこの状態。ふたたび叩くときは金鑄で合図を送りながら、リズムカルに。「相槌を打つ」ってこれか! 今では機械式ハンマーを使うことも多いんだとか。



玉鋼を叩いて形を整えたら、今度はテコという鉄棒とくっつける。温度、タイミング、ムズカ〜!



数度のチャレンジ失敗で半べそになりながらも、なんとかくっついた! 満面すぎる笑みが漏れっ!



くっついたら、今度は小さくバラけた玉鋼を、上に積んで、さらに熱して叩いて大きな塊にする!



でかくなったら、タガネで折り目付けて、何度も何度も折り畳むんですよ! 鉄のミルフィーユ状態!

② 刀の形が見えてきた!

鉄のミルフィーユができたなら、それを刀の形に。でもやってることは、熱して叩いて、なんですね。



鉄の塊をながーくのばして、その先ちょっから刀の形らしく叩いていくわけ。当然のことながら刃のほうを薄く、反対側(棟)を厚く。まっすぐになんてムリです! 叩くほどグニャグニャ。ユリ・ガラスの触った刀という形状に。



右端の長い状態から、徐々に刀の形に近づけていく。右から2番目から3番目の間に、切っ先の斜めのラインが逆になっているのがわかるでしょうか? こうして打ち出すのは、刃の強度を切っ先まで保つためなんですって。それにこのほうが肌の模様がきれいだし。



行光刀匠の綾杉肌

今回先生をお願いした高野行光刀匠の作る刀の特徴は、その「肌」にある。「肌」というのは刀の表面にうっすらと見える模様のようなもの。写真にはなかなか写りにくいけど、樹木の年輪のようなものが見えるだろうか? 誰にでも簡単にマネできるようなものでももちろんない。刀を見れば、すぐに刀匠のものだとわかる。しかし本人は「そのほうが売れるからね」とあくまでカジュアルだったりするんだよねえ。

陶芸のように日本刀作りも趣味にしたい。カジュアルに！

実は今回の取材は、この記事はじまって以来の2日かけたものでした。ふらっと1日行くつもりだったのだけど、刀匠のすすめで、事前に打ち合わせしようということになり、打ち合わせに来るならちょっと取材の日のハイライト部分を軽く体験しておきますか。ハイライト部分をやる時間があるなら、ついでに工程の最初のほうもやっておきますか。次は何時からこれですか。なるべく早く来て下さい。なんならもう1日増やして、もっとやろうか？ いつこれ？ 17日はどう？ と、いつのまにか、刀の世界に引きずり込まれそうになっとった！

というかですね、実は、これ、工房に入って、ちょっと作業をはじめてみると、やめられない楽しさがあるんですね。ずーっとやってしまう。ふいごをシュコーシュコーを左手で操作しながら、赤く輝く鉄を見ていると、たき火をみてぼーっとしてしまうような麻薬的な時間が流れるし、鉄を取り出して金

鋸でゴン！ゴン！と火花を飛び散らせると、自分の中の不純物が火花となって体から飛び出していくような気もする。単純な作業の繰り返しなのに、いや、単純な作業でしかも奥が深いのがゆえに、延々と作業を続けてしまう。

これは……楽しい！

先生の高野さんは刀匠のイメージとかけはなれたカジュアルなキャラクターだけど、いざ作業となると眼光鋭く、無駄な動きがない。そして指導は、なにもいわずに自分で作業をして、「どうぞ」

と席をゆずるだけ。つまり、見てかっさに盗めと！ それって思いつき職人の教え方じゃないっすかあ～。カジュアルなところと、締めるところ。作る楽しみだけでなく、日本刀をとりまく現在の状況を深く感じさせる取材だった。とりあえず、僕も、ひとふり持ちたいiiiiii!! 美しいからね。

『小橋工房』であなたも「小刀」を！

今回の取材がきっかけで「小刀工房」は一般参加も受け付けようとする。様々なコースを用意するが、初級は、刀匠の指導のもと誰でも簡単に1時間まで制作体験の体験も可能だ。費用は、材料費、制作準備作業、研ぎ、白錆止めなど。1人1刀（送料、送料別途）。

連絡先：小橋工房 〒100-0001 東京都豊島区池袋2-1-1

TEL: 03-3581-1111 FAX: 03-3581-1112 E-mail: kozuka@smallshop.co.jp

営業時間：10:00～18:00（水曜定休）

〒100-0001 東京都豊島区池袋2-1-1 小橋工房